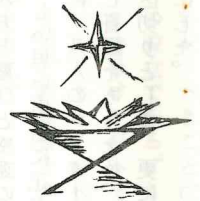


仙台司教区 教区事務所だより

クリスマス おめでとう



(第 50 号)
昭和56年12月1日

私たちが 私たちの司祭を育てよう!

12月6日・邦人司祭育成の日

毎年12月の第一主日は邦人司祭育成の日。全信者は祈りとぎせい(献金など)を捧げることが義務づけられています。邦人司祭育成の必要は司祭の不足や老齢化、召命の減少に關連して考えられがちですが、本当はそういう緊急な理由からだけではありません。

カトリック教会はプロテスタント教会とちがって、教会位階制度(ヒエラルキヤ)を中心にしてつくられており、独身を守る聖職者(司教、司祭)をいつも必要とします。カトリック教会が正常に存続するためには、どうしても司祭を育成しつづけなければならぬのです。司祭育成は、カトリック教会の本質と結びついた、全信者が協力して果たすべき使命といえるでしょう。

日本の教会はこれまで、かなりの外国人宣教師に助けられました。いまでも約八百六十人の日本人司祭に対して、外国人宣教師は千

人をこえています。もう日本の教会は日本人司祭で支えられるべきです(司教はすべて日本人になっていきます)。司祭は他の宗教のように世襲で生まれるものでも、また強制によって育てることもできません。私たち信者の中から、信仰によって神の召し出しに忠実にこたえることで生まれるのです。これがただひとつの道です。

仙台教区にとっても邦人司祭の育成は、すべてに優先するもの。教区民全員が信仰を深め、祈り、知恵を出し合い、自分の信仰にかかわるものとして考えましょう。信者はそれぞれの場合で果たすべき役割もっています。まず第一に仙台教区全体に邦人司祭育成のふん囲気をつくりましょう。司祭育成が私たち信者の使命であることを理解することはもちろんですが、司祭職への理解と尊敬はその基本になります。司祭に対する尊敬がないな

ら召命が生まれるはずはありません。また同時に、すばらしい司祭の存在が、信仰生活に本當の喜びを感じさせるものです。

あらゆる機会にそれぞれの教会で、司祭育成のことを話し合いましょう。信徒会、壮年会、婦人会、青年会、学生会などで。とくに家庭集会で話し合うことはもつともものぞましいことです。司祭召命が生まれ実を結ぶためには、教会や家庭全員の温かい協力が必要だからです。責任ある大人たちの言葉や行いが(司祭も信者も)、青年や子どもたちの心に召命の芽を育ててゆくのです。

高校生会、中学生会、子供会、教会学校、ボーイ・スカウト、侍者会などは、青年会や学生会とともに直接に司祭召命の対象となる大切な組織です。それだけに、十分な配慮がなされるべきです。12月6日の邦人司祭育成の日を迎え、これを機会に全員が邦人司祭育成のために働く決意をつよめましょう。

司教様の日程

(11月12日現在)



- 11月29日 宮城県信徒連絡協議会第一回集会
- 12月1日 宮宗連報編集委員会(仙台)
- 6日 社会福祉法人評議員会
- 7日 教区司祭団月例会
- 8日 司教会議(東京)
- 14日 教区司祭団役員会
- 16日 スペルマン病院クリスマス会
- 25日 深夜ミサ(元寺小路教会)
- 1月1日 新年の平和ミサ(元寺小路教会)

第九回

三教区合同司祭研修会(佐渡)

教皇訪日メッセージを学習

仙台、浦和、新潟の三教区の司祭達の合同研修会が10月20、21、22日の二泊三日、佐渡の両津市で開かれた。この研修会は、十六年前(昭和40年)、第二バチカン公會議が終了した直後、上記三教区の司祭が松島に集まって公会議諸教令の解説を何人かの司教(公会議に出席した公会議教父)から聞く集会を持つたのが最初。それが第一回で、以後は隔年毎に三教区交代で続け、今年で第九回を迎えた。

今回のテーマは、「教皇訪日が残したもの」
 ー福音宣教と平和の証しー。講師に浜尾文郎横浜司教を招き、講話と教皇訪日にまつわる裏話など、興味深く聞いた。分科会では①家族教会 ②青少年との対話と理解 ③召命促進 ④司祭の職務と靈性 ⑤社会問題、政治問題と教会のかかわり及びその役割 ⑥教会と愛の奉仕の六つで、教皇が二十のメッセージで触れたすべてに及び話し合われたが、時間的制約から十分話しつくされないうらみはあった。

しかし同じ司祭である立場から、教区や各所属会、国籍を越え各自が感じていること、体験した事が自由に話され、互いに大きな励ましと慰めを得たようだ。今後は当分の間日本教会の課題となる「教皇来日が残したもの」について、台風一過とせず靈的ショックとして正しく受けとめるよう期待された。

明後年の第十回(二十周年に当たる)は仙

台教区が主催して行われる予定である。

女子ドミニコ会

来日五十周年



仙台の聖ドミニコ女子修道会では、去る10月10日、来日五十周年の記念式典と共に、八人の修道女の誓願二十五周年を祝った。

昭和6年、フランス、カナダ、アメリカにそれぞれ国籍を持つ五人のドミニコ会修道女が来日、現在地角五郎に最初の住居を定めてから五十年になる。戦中、戦後の困難の時を経て現在に至ったが、仙台に蒔かれた種は、主の豊かな恵みのもと、東京、京都、都城と花開き、現在約九十名の日本人修道女が、教育、福祉事業を通じて宣教に献身している。

当日は、仙台教区長・佐藤司教と八人の司祭の共同ミサと引き続き祝賀会が聖ドミニコ学院を会場に行われた。この日のため、五人の創立者のうち今なお健在である八十六歳のドミニク・デ・ロゼールがフランスから、七十八歳のローズ・カトリヌがアメリカから、七十四歳のマルグリット・マリーが仙台から、また二十八年間日本で働かれたジョルジアナがそれぞれ招かれて出席。また、この日まで援助をおしまなかつた兄弟なるドミニコ会士、多数の恩人、友人方と喜びと感謝の祈りを共にし、かつなつかしい思い出話に花が咲いた。

記念ミサの間に、八人のシスターが立誓願二十五年を記念し誓願をあらため、全修道女達もこの日を一区切りとして、更に一層精進する覚悟を新たにされた。

第十回

東北地区カトリック学校

教育研修会

△仙台V



去る10月16・17の両日、仙台・聖ウルスラ学院中・高等学校で東北地区カトリック学校教育研修会が行われた。東北六県と新潟県の小・中・高合わせて十八校、百五十三人の教師が参加。「新指導要領に基づきカリキュラム編成ー新指導要領に基づき各校はどのようにカリキュラムを作成したか」というテーマで行われた。一日目は公開授業と基調講演があり、開会式で佐藤司教から、「本当の教育はどうあるべきか、その本質にもっと近づくように研鑽してほしい」と励ましのことがあった。

基調講演は東大助教授・佐伯胖氏により、「学ぶ側からの授業実践」と題して行われた。「教育は直接結果だけを求める場合には生徒のやる気の動機、つけよりは、むしろ失敗を恐れるという失敗回避の方向に進み、やる気をなくさせてしまう。結果を急がず、生徒自身が主体となつていくという意識、自覚のもとにその意味を考えさせる指導が必要」と指摘され、これからの教育観を示唆された。分科会では、カトリック校の多くの問題点を話し合い、最後に、秋田・聖霊高校・富永松男校長により「カトリック学校の建学の精神をよく理解し、その学校独自の潜在カリキュラムを明確にし、実行していけるよう努力してほしい」との講評で二日間の研修会を閉じた。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

さいはての地に光を！
創立五十周年記念

白菊学園

八戸市



八戸市の聖ウルスラ修道会経営の白菊学園（理事長ノエラ・ゴドロ）は、去る9月20日創立五十周年の記念式典を行った。

白菊学園は昭和6年5月9日白石よしみ女士により「八戸和洋裁縫女塾」として発足。

しかしその二年後に、種々の事情で経営はカトリック教会に移管、聖ドミニコ会、中村由太郎氏、ノートルダム修道女会と幾たびか経営母体が変わり、最後に聖ウルスラ修道会にゆだねられ現在、幼・小・高等学校がある。

八戸市は一昨年市制施行五十周年を迎えたが、市民と共に半世紀を歩んだといえよう。

記念式典には佐藤千敬司教を初め、四百五十八人の参列者を得、五十年の受けた恵みを感謝した。

ネパールから

看護婦さん



仙台・スベルマン病院

日本カトリック医師会仙台支部長・早坂養吉氏の招きで、ネパール結核予防会付属病院勤務のミセス・メーラー・チトラーカーさんが、9月中旬来仙。スベルマン病院長・前田敏行先生の御好意により同病院看護婦寮に寄宿しながら、結核予防会宮城県支部に勉強に通っている。スベルマン病院の看護婦さん達のお世話でようやく日本の生活にも慣れ元気に生活

記念事業の中で特記すべきことは、「白菊学園教育振興基金」の設立である。これは奨学資金制度で、五十年の受けた恵みを少しでも地域社会に還元していこうとの学校の望みが実現したもので、父兄、教職員を初め、多方面から寄付が寄せられた。

このような例は青森県でも今までなく、県教育委員会からも高く評価されている。

仙台教区

修道女連盟役員改選



仙台教区修道女連盟では去る11月2日役員改選が行われ、次の四人が新役員となった。

任期は一年である。

- 会長 工藤 正子（善き牧者修道会）
- 副会長 リーズ・ラミ（オタワ愛徳会）
- 会計 正木 郁子（聖ヨゼフ会）
- 書記 栗原志つ江（女子パウロ会）

している。言葉は英語が共通語であるが、ようやくカタコトの日本語が話せるようになった。

「わたしネパールからきたカンゴフです。

名前はメーラー・チトラーカーです。どうぞよろしく」を連発。看護婦寮でカレライスとお茶で歓迎会が催されたり、他の留学生と共に京都方面に旅行したり、すっかり日本通。「日本は美しい、人々はとても親切。でも物価がとても高い」と感想を話していた。十一月中旬には二か月の研修期間を終了し帰国する予定である。

第三回
岩手カトリック青年の集い

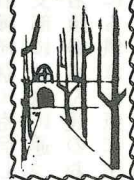
例年のように、今年も10月17・18の両日、岩手山のふもとにある東日本レクリエーションターで、仙台からも参加者を得、総勢十七人で「岩手カトリック青年の集い」が行われた。岩手県下には、青年会という組織を持つている教会は盛岡を除いてほとんどない。今回、久慈、花巻教会からも参加者があり、盛岡中心からようやく県全体に広がりを見せて来たように感じられる。

年に一回行われるこの集いは岩手県内の青年会を確立することを目的としているので、参加者の数は多くなくても、着実に一步一步歩を進めているように思う。当日は晴天に恵まれ、雄大な岩手山を背景に、目を見張るばかりに美しく紅葉した大自然の懐の中で集いは始まった。

指導の笹直哉神父は、普段青年と接する機会が多いので話がわかりやすく、「心の輪、信仰の輪」をテーマに私達に深く考える時を与えて下さった。

話し合いの中で青年会の持つている諸問題が出されたが、いずれも共通点があるように思われる。それをどの様に解決していくかは各教会の青年会によって違ってくるのではないだろうか。来年は参加者がより多くなるように各教会に呼びかけ大きな輪にしていきたい。

邦人司祭
育成の日によせて



板垣 勤(花養教会常任司祭)

教会は司祭養成のために神学校を設けて、司祭として奉仕することを望む人を養成しています。現在、仙台教区からは三人の神学生が東京カトリック神学院に学んでいます。司祭養成の期間は六年あるいは七年。かなり長いように感じられ、もっと早く教会で働ければとも考えられますが、この長い期間をかけて目に見えない何物かをはぐくみ、そして一人の司祭が誕生するのです。

神学校での一日の生活は、まず朝の祈りとミサで始まり、その後朝食、掃除、そしてたくさん授業がつづきます。将来、司祭として教会に奉仕するために必要な、哲学、神学、聖書学、そして語学などです。土曜日と日曜日は、アポストライトス(使徒職)にあてられ、それぞれがのぞむ使徒職活動を体験します。近くの教会の日曜学校の先生、青年会の指導、聖書研究会、病院訪問、いの中の電話などさまざまです。また神学院での神学生の生活や活動は、神学生の自主的な話し合いによって行われています。このように神学生の生活は内に向けられているだけでなく、外にむけて積極的に働くことが一人ひとりの課題となっています。

以上のような神学校の生活を六年あるいは七年間つづけ、神の特別な呼びかけに答え、

「神と人びとに奉仕する者」として司祭叙階の恵みを受けるのです。教会は一人ひとりの信者によってつくられており、司祭はその中で、ミサを中心とした秘跡執行の奉仕者として働きます。しかし奉仕者は司祭だけに限りません。教会の中にはたくさん役務(ミニストリー)があります。とくに信徒には信徒固有の使命があり、それぞれの立場を通して皆が教会の奉仕者になることができます。教会は多くの人びとのさまざまな働きの中で成長するのです。こうした教会の奉仕職についても、私達は、あらためて反省し見直す必要がもとめられているのではないのでしょうか。

司祭月例会で

教区司祭の月例会のとき、司祭召命促進のことが話題になった。各司祭は自分の召命体験談を話したが、「身近に、自分も司祭になりたいと思わせる司祭がいた」と誰もが話していた。これはまことに当然のことなのだが、ふりかえって自分はどうか、と考えると……司祭一人ひとりの責任はきわめて重く、この点ではどの司祭も、もっと努力しなければと自戒する以外にはないだろう。

もっとも一人ひとりの司祭が十分でなくとも、司祭職そのものは崇高なものだからといいたい、それでも人一倍ぎせい心と自己放棄を必要とする司祭職に若い人たちの心をひきつけるためには、やはりいい模範を示さなければならぬ。誰もがそう感じたようだった。



先日、友人の一人から便りをもらった。彼は、親子四人その日暮らしというきびしい生活を送っているが、みじめさのひとかけらも感じさせない。むしろ、さわやかさ、希望をひとに与える。

「いつもいつも神様を頼らざるをえない生活状況は本当に祝福です。彼以外に我々の財産はないことをいつも思い知らされるからです。『見よ、私は新しいことをする。今、もうそれは起こっているのです。確かに私は荒野に道を、砂漠に川をつくるでしょう』(イザヤ43) 主に賛美!」

彼の語ることは重い。それは四人の生活の重さ、生きていることの重さ故なのだろうか。

興味をそそる話しを聞かせてくれる人は多い。しかし、重いことを語る人は数少ない。マザー・テレサ、ワレサ、ヨハネ・パウロ二世、彼らも後者に属する人々なのであろう。

教会は「神の国」実現のため、「教区目標」「何々週間」うんぬんと次から次へと新しいコトバを生み出す。もし、教会の語るコトバがいつも人々の頭上を通り過ぎていくとすれば、ことばの重さと関係があるのでは? かけ声のコトバだけが飛び交い、重いことばが語られるのでなければ、人びとの心に沈んでしまるとどまるということはありませんか? 一九八一年の最後の月に当たって猛反省している次第。(狼河原)

読者のべえじ
青年会練成会を終えて



△元寺小路教会 V

「祈りと召命」というとても難しいテーマで、元寺小路教会青年会の練成会が10月9日から三日間、東京教区の門馬邦男神父の指導で行われた。

この練成会是对話の形で進められ、祈りと召命について私たちがどのようにとらえているかをともに考えた。「祈りとは、形式にこだわらず、その時の自分を素直に表わせばいい。神を信頼しているからこそ祈るのだ。時には、神につつかかってもいい。『父さん、あのね!』という感じで話しかけよう」と。召命についても、特殊なものとしてではなく、私たちが日々の生活の中で神の呼びかけに答えていくというところを確かめた。

今回の企画は、気楽にお互いの意見が出し合えるような雰囲気を作ろうということで、講話も自分の意見を自由にさせるための一つのきっかけにしたいとしていたので、いろいろな機会に、私たちにとつきつけかけや刺激となった。その刺激が効を奏したのは二日目の夜、青年会に対して言いたいことを皆で話し合っている時。門馬神父に、初めは、「不完全燃焼の顔」と指摘された顔が、少しずつ「完全燃焼の顔」に変わっていった。

三日目の朝、講話のまとめと「がんばれ!」とのげましの言葉をいただき、最後にミサ

を共に捧げて、練成会は終わった。

練成会の一週間後の反省会でまずあげられたのは、時間に対するルーズさである。おいしいパンを焼こうと思えば、パン種を十分練ることから始めなければならぬ。この練る作業は参加者一人一人の自覚によるものだ。「練成会」が物事を練り、その上で何かしていく集まりだとしたら、この練る作業がいかに大切であるか考えさせられるのである。

(元寺小路教会・安藤めぐみ)

△クリスマスによせて V

「この夜」 岸田 衿子・詩

ローソクの焔の中には

水の音もきこえます

ひつじも兎も、ねむっています

マリアさま

かえば桶のわらをたしまししょう

まだ眠りたりない

子供たちのために

こんやはヘラクレスも

うたうたいます

牡鹿のつのも、せいうちの尾にも

雪はやわらかに積ります

マリアさま

ひずめの音を聞きましよう

地球から迷い出たものを

迎えるため



キリスト教会の歴史

教会一致運動に力をつくすジャカ・ブック社企画作品 **全10巻**

日本語版監修/上智大学教授ヨゼフ・フィルハウス A4判 各巻5,500円+300

子供から大人まで全ページカラーのさし絵をたのしみながら、やさしく学ぶ教会の歴史。
過去をふりかえることは将来のため、歴史を学んで明日の教会を築こう。

女子パウロ会

〒980 仙台市本町1-2-12 (0222)23-8639

全巻内容

- ①初代のキリスト信者
- ②黄金時代
- ③古代世界の終わり
- ④蛮族への道
- ⑤中世の明暗
- ⑥近代人の誕生
- ⑦プロテスタントとカトリックの改革
- ⑧革命の時代
- ⑨教会——戦争と国家のはざままで
- ⑩わたしたちの時代

おらが教会 (14)

岩手・久慈教会



岩手県の北東部、北上山地の沿岸、美しい太平洋に面した漁港、南に宮古、北に八戸（青森県）の丁度中間に人口四万の久慈市があります。

久慈駅から徒歩で五分、町の繁華街にあるおらが久慈教会（聖母幼稚園）は、一九五三年七月二十一日献堂、初代アントニー・ブラウン神父以来二十八年の間、二代ルカ・ストッフエル神父、三代フランシスコ・ガイッセル神父、そして現在のカルロ・トマ神父と引き継がれ、ついこの前ようやく二十五周年のお祝いをしたところです。

信徒教わずか五十人足らずの県下で一番小さな教会ですが、先輩の残してくれた家庭的な雰囲気の中で、みんな頑張っております。日曜日は十人から十五人ぐらゐの出席ですが、御ミサ後、図書室でお茶を飲みながら、伝道婦さんを中心に色々話をしながら、お昼までゆっくり過ごしております。人数が少ないため、新しい人が来ると大歓迎で、すぐ久慈弁になつてしまうので怒られます。

信徒会は守護の聖人「三木パウロ」の名をいただき、三木パウロ会と言ひ、初代会長・中館さんから中村さん、佐々木さんへと続いていますが、会員が少ないので何を行行にも全員協力しないと出来ません。全員が役員です。主な行事は教会訪問、老人ホーム訪問、バザー、遠足、そして家庭ミサ等です。教会訪問は、他教会とはなれてゐるため、普段交流が出来ないので、訪問することにより同じ信仰を持つ兄弟が、仲間が沢山いることを知り、励みになります。

バザーは毎年行われ、利益は信徒総会でどうするか決めますが、今年は教会維持費に入れることにしました。

家庭ミサは霊名の祝日にその信者の家に集まり、皆で祝います。御馳走も又楽しみです。久慈教会には、時々珍しいお客様が見えます。今年の夏には、スイスから神父様と高校の先生達一行が久慈を訪問、「すきやきパーティー」、歌や踊りで楽しく過ごしました。幼稚園の先生方が浴衣姿で「久慈湾小唄」を踊ると、すぐ舞台上に上り一緒に上手に踊り、さすが先生がた、と大拍手でした。言葉が通じなくても何か暖かいものを感じ、同じ信仰を持つ者の出合いの喜びを味わいました。

11月23日、五年振りに司教様をお迎えして堅信式が行われます。今回は六人の兄弟が堅信を受けるために準備中です。

久慈教会には三つの宝といわれる三人のおばあさんがおります。中村千賀さんは私達に祈りの大切さを教えてくれます。新田さんは

いつも聖書を片手に私達に忍耐と希望を教えてください。もう一人の及川のおばあちゃんも字も書けない人でしたが、いつも全身からあふれ出る喜びを表わし、信仰の喜びと強さを教えてくれました。人が少ないため、何かと神父さまや伝道婦さんに負担をかけていますが、先輩の残してくれた宝を守りながら、新しい気持ちで引き継いでいければ、と思つております。幸い最近若い人が増え、なんでも中心になつてやっていますので希望がある教会です。どうぞお立ち寄り下さい。

(三木パウロ会会長・中野信男)

おしらせ

◎映画「アウシュビッツ・愛の奇跡」

仙台で 再度上映

好評を博したコルベ神父の生涯を描いた劇映画「アウシュビッツ・愛の奇跡」が仙台で再度上映される。今回は、ぜひお見逃しなく、
●日時 12月17日(休)午後2時・6時30分
●場所 婦人会館(仙台市錦町一―120)
●前売券 大人六百円、小中学生四百円
詳細は仙台パウロ書院にお問い合わせ下さい。

◎教区事務所の冬休み

昭和56年12月24日、昭和57年1月6日まで但し休業中、緊急の要務をお持ちの方は、司教館(0222-19713030)の三浦神父又は、平賀神父にお問い合わせ下さい。

仙台司教区事務所だより 50号
昭和五十六年十二月一日
発行所 仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号
TEL 0222 22 7371